



荒崎巡検

実施日	2016年10月15日(土)
参加学性	地理学科2年生18名, 3年生2名, 4年生1名, 計21
調査地	三浦半島荒崎海岸(神奈川県横須賀市)
引率教員	藁谷哲也 教授, TA前田拓志

C O M M E N T

本巡検は、地理学科2年生の専門科目「地形学実験2」および同3年生の専門科目「自然地理学特別講義2」の野外実習として、三浦半島荒崎海岸および小網代湾・浦の川流域(小網代の森)で実施された。荒崎海岸は、三浦半島南部の西岸に位置する相模湾側に突出した岩石海岸である。海岸部には、関東大地震によって隆起した波食棚が広く分布し、またその背後には20~30mの海成段丘が発達する。小網代湾は、相模湾に面したリアス式海岸であり、その背後には洪積台地を開析する浦の川の流域が広がっている。本巡検では、これらの地域をフィールドにして、海岸地形および洪積台地の地形発達を学習するとともに、地形計測の調査法を習得した。

当日は、午前9時50分に京浜急行電鉄の三崎口駅に集合し、そこから路線バスに乗って荒崎海岸へ向かった。到着後はまず、約6万年前に形成されたと考えられている海成段丘(三崎面)上に登り、海岸周辺の地形・地質概要を学習した(写真1)。次に海岸部の波食棚に移動した。波食棚は、急傾斜した新第三系の泥岩および凝灰岩の互層(三崎層)によって構成され、その表面には洗濯板状の起伏が発達する。この洗濯板状起伏は、凸部が凝灰岩層、凹部が泥岩層によって構成されており、侵食に対する抵抗性の差を反映した地形(差別削剝地形)と考えられている。しかし、その地形形成プロセスは、それぞれの岩石の力学的な強度の差によるのではなく、乾湿風化(スレーキング)特性の差異に起因すると考えられている。学生たちは、地層および波食棚の成り立ちを学習するとともに、互層を構成する岩石の硬軟を岩石ハンマーで叩くなどしながら観察した(写真2)。次に、海岸の南部に移動し、段丘を構成する風性堆積物層(関東ローム層)と基岩層(三崎層)に着目しながら海食崖を観察した。また、海食崖に発達するノッチや、塩類風化が関与し形成される窪み上の微地形(タフォニ)を観察した(写真3)。その後、昼食休憩をとった。

昼食後は、午前中に観察した洗濯板状の地形を定量的に捉えるために、波食棚の地形断面をハンドレベル、標尺、巻尺を用いて計測し、地層の走向や傾斜をクリノメーターで計測した。また、起伏を成す泥岩、凝灰岩の硬さを、シュミットハンマーを用いて測定した。その後、再び路線バスに乗り、浦の川源頭部へ移動した。浦の川は、台地を開析する全長約1.3 kmの小河川である。しかし、この流域は、市街化が進む周辺地域とは対照的に、上流域から下流域の湿地や干潟に至るまで全体が「小網代の森」として保全され、豊かな自然環境が残っている。到着後は、上流域の谷底を散策しながら台地を刻む谷の発達過程を学習した。また、谷頭から河口を縦断し、上流から下流に至る流域の地形や環境の遷移を観察した(写真4)。その後、小網代湾の南側をバス停まで移動し、バスで三崎口駅に戻ってそこで解散となった。

当日は、天気にも恵まれ絶好の巡検日和であった。午後になると、日差しを遮るものが何もない海岸部ではむしろ暑ささえ感じた。慣れない地形計測に悪戦苦闘しながらも、一日を通して各自協力しながら取り組むことができた。この後の講義では、地形計測のデータを用いて波食棚の地形プロファイルを作成し、シュミットハンマーの測定値の結果整理を行う予定である。

P H O T O



金沢巡検

実施日	2016年9月13日(火)～9月16日(金)
参加学性	地理学科2年生19名
調査地	石川県金沢市
引率教員	矢ヶ崎典隆教授, TA高橋昂輝

COMMENT

本巡検は、学部2年生の必修科目「野外調査法(実習含)」の一環として、9月13～16日において、石川県金沢市で実施された。本巡検の目的は、これまでに学んだ地理学の基礎的知識をもとに、学生自らが調査を計画するとともに、聞き取り調査などのフィールドワークをおこなうことにより、野外調査に関する実践的スキルを習得することであった。

北陸新幹線の開通に伴い、近年、金沢は観光都市として一層注目を浴びている。金沢には、さまざまな観光資源が存在するが、なかでも伝統産業は重要な資源の一つとして位置づけられる。本授業では、観光都市としての金沢の概要を地理学の視点と方法により理解するとともに、伝統産業の存続に向けての取り組みと今後の課題について検討した。前期の授業において、学生は関心のあるテーマを各人一つ設定し、それについて事前学習をおこなった。調査テーマは、九谷焼、大樋焼、三弦、琴、加賀提灯、水引、茶釜、二俣和紙、竹細工、金沢漆器、加賀象嵌、桐工芸、加賀友禅、郷土玩具、金沢仏壇、和菓子、金箔、伝統産業の継承、加賀野菜であった。

9月13日午後1時、宿泊先の金沢兼六荘に集合後、参加者全員での巡検を実施した。尾山神社、長町武家屋敷跡、にし茶屋街、金沢城、兼六園、主計町、近江町市場など、金沢中心部を広域的に見て回り、金沢市街の全体像を把握した。2日目および3日目はそれぞれのテーマにもとづき、各自がフィールドワークをおこなった。聞き取りのため、伝統工芸の販売店、職人の工房、市役所などをそれぞれが訪問した。

9月13～15日の午後7～9時にはゼミを実施し、学生はそこで調査の成果を報告した。学生の報告は、それぞれの伝統産業の性格や構造が多様である一方、多くの産業が後継者不足に直面していることを示した。本調査で収集した一次資料をもとに、学生は後期の授業(地域分析法)において、それぞれのテーマについてより詳細な分析をおこなう。また、最終的な調査成果は報告書としてまとめるほか、11月の日本大学地理学会秋季学術大会において学生全員が個人発表をおこなう。本巡検は、9月16日午前、宿泊先の金沢兼六荘にて解散した。

PHOTO



浅間山巡検

実施日	2016年8月1日(月)～3日(水)
参加学性	地理学科2年生18名
調査地	浅間火山周辺
引率教員	藁谷哲也教授, TA前田拓志

COMMENT

本巡検は、地理学科2年生の専門科目「地形学実験1」の野外実習として行われた。実習では、浅間火山の噴火活動が作り出してきた様々な地形を題材にして、火山地形や災害学習を行うとともに、基礎的な地形計測の調査法を学んだ。

巡検1日目は、正午に軽井沢駅に集合し、天明3年(1783)の噴火に関連する地点(浅間火山博物館・嬬恋郷土資料館・鎌原観音堂)を訪れた。天明3年の噴火では、溶岩や火砕流が噴出し、山体の一部が水蒸気爆発して岩なだれも発生した。学生たちは、これらの場所で浅間火山のダイナミックな地形プロセスや噴火にかかわる災害学習を行った。また、ハンドレベルとポールを用いて、岩なだれ堆積物の厚さを求めた(写真1)。

2日目は、午前中に、約1.6万年前に噴出した火砕流原を開析する谷が発達する御影新田を訪れた。この開析谷は、垂直な谷壁と平坦な谷底からなり、「田切」地形と呼ばれる。また、谷壁の下部には、塩類風化や凍結・融解作用が関与して形成されたノッチ状の凹みが発達している。学生たちは、田切地形の中を散策し、谷壁で火砕流堆積物の断面を観察する(写真2)とともに、シュミットハンマーを用いて堆積物の硬さを測定した。また、形成プロセスの違いに着目しながらノッチを観察し、その形状を実際に計測した。その後、昼食休憩を取り、千曲川の河岸段丘を訪れた。学生たちは、予め作成した段丘区分図を片手に、実際の段丘面を確認しながら散策した(写真3)。そして、次の目的地である塚原へ向かった。塚原周辺は、約2.3万年前に、当時の火山体が崩壊して岩なだれが流下した。その痕跡として、ここには流れ山(巨大な岩屑ブロックからなる小丘状の地形)が数多く分布している。学生たちは、予め地形図を判読して作成した、流れ山分布図を見ながら周辺の地形を観察した。また、簡易水準測量を行い流れ山の大きさを計測した。

3日目は、午前中に白糸の滝と黒豆河原を訪れた。白糸の滝では、約2.1万年前に、浅間火山東麓の小浅間山から噴出した軽石を観察した。黒豆河原では、天明3年に噴出した溶結火砕流堆積物の露頭がみられる。学生たちは、溶結部の特徴に着目しながら、露頭の観察をするとともに断面形を計測した(写真4)。また、溶結した堆積物の硬さをシュミットハンマーで測定した。その後、浅間牧場で昼食休憩を取った後、最後の目的地である浅間大滝・魚止めの滝へ移動した。これらの滝は、浅間火山よりも古い第三紀の溶岩を造瀑層として形成されている。学生たちは、滝および溶岩のスケッチをするとともに、この周辺地域一帯は古くから火山活動が活発であったことを学習した。その後、軽井沢駅に移動し、そこで解散した。

本巡検は、2年生にとって地形調査法を主眼にした初めての巡検であった。この3日間の実習によって、地形観察・計測のイロハが身についたのではないだろうか。

PHOTO



実施日	2016年5月28日(土)
参加学性	1年生:89名, 2年生:4名, 計93名
調査地	山梨県上野原市
引率教員	引率者:水嶋一雄教授, 江口誠一准教授, 佐藤浩准教授, 任海助教 TA:梶山貴弘, 宮坂諒, 須田萌子, 川田奈穂

C O M M E N T

本巡検は、地理学科1年生専門科目「自主創造の基礎1」の野外実習として、地理学に関する現地調査の基礎的な方法と、地形図判読法の習得を目的に実施した。

調査地である山梨県上野原市は、桂川が形成した河岸段丘が発達しており、特徴的な景観がみられる。また段丘面上には、五街道の一つである甲州街道が東西に横断し、江戸期には甲州街道の17番目の宿場町として栄えた。

当日はJR上野原駅に10時に集合し、午前中は桂川左岸地域を調査した。まずは、ハンドレベルを用いて、段丘崖の比高測定を実施し、段丘面上では、上野原用水の用水路と、それを利用する農地の観察をおこなった。次に旧甲州街道において、疱瘡神社に残る江戸日本橋から18番目の一里塚である塚場一里塚や、旧上野原宿の本陣跡などを見学し、また現在の市街地の景観を観察した。その後、さらに段丘を登り、段丘上の農地の灌漑のために、昭和初期に造成された貯水池である月見が池を見学し、午前中の行程は終了、昼休憩となった。

午後は、河岸段丘の高低差を利用した、水路式発電所である八ツ沢発電所の様子を段丘上から観察し、桂川右岸の鶴島地域へと向かった。鶴島地域では、まず露頭において段丘堆積物の観察や、地層の走向と傾斜をクリノメーターによって計測し、地質構造の把握を目指した。次に、地形図に記載された高位段丘にある三角点を目指した。地形図を判読しながら、段丘を登ることによって段丘の高低差を把握し、河岸段丘の特徴を体感できた。その後、地形図上と同一の地点に、三角点があることを確認し、全行程は終了。17時頃にJR上野原駅で解散した。

P H O T O

